

てこな・ミュージック・ジャーナル

オンブラ・マイ・フ

前回は音楽記号のお話しをしました。その中の「ラルゴ」は楽譜に書かれていると、ゆっくりという意味になるけれど、本来は「幅広く」「ゆったり」となって、イタリアで洋服を注文するときに、サイズを大きくしたいときに使うといったお話をしました。さてその「ラルゴ」と呼ばれる曲が「オンブラ・マイ・フ」で、この名を知らなくても、テレビCMで流れることが多いので、もっと有名なクラシックということになるでしょう。今回は、その作曲家であるヘンデルについてお話ししたいと思います。



ヘンデル：ハイドンの原画にもとづく銅版画（1749）

友人と決闘

ヘンデルは1685年にドイツに生まれ、のちにイギリスに渡り、大活躍をしたことで知られています。1759年まで生涯独身であったヘンデルですが、さまざまなエピソードにも恵まれ、なかなか興味深い人生を送っています。

まずはドイツでの活躍です。18歳、ハンブルクで知り合って友情を深めたのが、同じ音楽家のマッテソンです。2人は意気投合して共演することがありましたが、あるとき、マッテソン作曲のオペラでヘンデルはチェンバロ奏者として、マッテソンは本職の歌い手として舞台上立っていました。出番が終わると、いつも通りにマッテソンがチェンバロ演奏席に戻ってくると、そこにいたヘンデルが席を譲らなかったので、劇場の外で剣を抜いて決闘という騒ぎに。マッテソンの剣がヘンデルの胸を突き、あわや！でも事なきを得て仲直りしたとか。

宮廷謀報役

ヘンデルはやがてロンドンに移り、音楽史上に輝く軌跡を残していきます。人生のチャンスはパトロンハノーファー選帝侯直属の宮廷楽長のポストを25歳の若さで手に入れたことに始まります。傑出した音楽の才能ばかりでなく、語学力と王宮情報収集能力に長けるヘンデルをハノーファー選帝侯は重用しました。1714年、ヘンデル29歳の時にアン女王が急死すると、ハノーファー選帝侯がジョージ1世として王位を継承して、ヘンデルの出番はさらに増えました。英語を話

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

せず、イギリスの伝統ある作法にも疎い新国王は、何かにつけて王侯貴族の批判的的になっていました。そこで何とか人気を回復しようと、水上の音楽会をヘンデルが取り仕切り、その後、国王はドイツに帰ると、宮廷情報をヘンデルから得ていたと言われています。

オペラ・バブル

当時、イギリスでは国債発行をめぐる投機熱が高まり、それがオペラブームにも波及し、その渦中でもヘンデルは大活躍。イタリア・オペラファンの貴族たちは、自分たちが熱中するオペラも投機の対象と考えたのです。1719年、「ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージック」という名で、国王は年間1000ポンド、貴族たちは1口200ポンドで50口を集め、「株式会社」組織を作り、オペラを21年間にわたり継続的に上演して儲けようと目論んだのです。ヘンデルは大人気のカストラート、セネシーノなどを出演させたため、観客動員数は予想通りとなったのですが、出費はかさみ続けました。結局シーズン8回で興業計画は変更となり、その後は、ヘンデル作品だけを取り上げることとなったのです。

そんな中に上演されたのがオペラ「セルセ」で、その中で歌われるのが、*ombra mai fù di vegetabile cara ed amabile soave più*。その意味は「こんな木陰は今までになかった どれよりも愛しく 愛らしく そして優しい。」歌うのは、オペラ「セルセ」の主人公、パルシャ王セルセです。この作品はありふれた恋物語のためか、あまり注目されませんでした。アリア「オンブラ・マイ・フ」だけは1人歩きし、もっとも人気のあるヘンデル作品として世界中で歌われ続け、その演奏回数は天文学的なほど。その数字が現在も、もちろん日々書き換えられているのは、みなさまご存じのとおりです。

『王宮の花火の音楽』

最後にヘンデルらしいエピソードをもう1つ。

壮大な音楽を求める国王にヘンデルは応えて「王宮の花火の音楽」を作りました。華やかな曲名の由来はというと、国王の権力喧伝のためです。ジョージ2世は大陸で起こったオーストリア継承戦争に、資金提供のみならず軍隊を率いて戦い、1748年戦勝国に名を連ねることになりました。しかし、海を越えてあえて参戦し国費をつぎ込んだ国王への批判が国内に巻き起こり、それをかわすために、勝利を華々しく祝う式典が計画されたのです。ヘンデルの序曲で始まり、そのあとに花火が打ち上げられるはずが、不発。花火は突然火の粉となって特設舞台は炎上、大騒ぎとなりました。でも機転のきくヘンデルのこゝ。序曲と大砲を交互に鳴らして、勝利を祝う雰囲気は何とかが保って、ますますその株が上がったそうです。